

# 現代の文学と思想

——戦争・格差から縄文再評価・社会変革へ——

## 綾 目 広 治

### 一

二〇二二年は、日本でも世界でも大きな事件が起きた年であった。日本では七月に、参議院選挙で応援演説中に元総理の安倍晋三が銃撃されて死亡するという事件が起き、また世界では二月に、ロシア軍がウクライナに侵攻するという事件が起こった。このウクライナ危機では欧米各国がウクライナ支援に動いたということもあって、ロシア軍は当初の目論見通りに作戦が遂行できていないようである。戦線は膠着状態のまま、長期化の様相を示し始めている。日本では安倍銃撃事件を契機に旧・統一教会の問題が浮上するという展開があり、予想以上に旧・統一教会が政界とくに自民党に食い込んでいることが明らかになった。そして、三年目を迎えたコロナ禍は、収束しそうな気配は今のところ無いのである。日本を含めた世界は、実に不安定で危険な道を辿って行っているのかも知れない。

こうした中で文学や思想は、状況にどう立ち向かうと

しているのだろうか。もちろん、文学や思想に対して現況に即応した対応を求めるのは、的外れな期待である。文学や思想というものは、状況から出てくる問題を掘り下げることで展開される、知的な営みであって、すぐさま提案なり答えなりを出すようでは、却ってその誠実さを疑われるであろう。そうではあるが、文学や思想は状況に真摯に向き合う姿勢を持つていなければならない。本稿では、そういう観点から注目されるべき、今現在の文学や思想について考えて見たい。

第一一回アガサクリステイー賞と二〇二二年度の本屋大賞を受賞した、逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』（早川書房、二〇二一・一一）は、第二次大戦下の独ソ戦が背景となっている物語である。独ソ戦は、ソ連側で兵士以外の民間人の犠牲者が一千万人を超え、兵士を含めての独ソ双方の死者は三千万人を超えたとされている。独ソ戦は、ヒトラーが言ったとされる「これは絶滅戦争なのだ」（大木毅『独ソ戦 絶滅戦争の惨禍』岩波新書、二〇一九・七）とい

う、まさに言葉通りの「絶滅戦争」であった。

——物語は、獵師として射撃が優れていた一八歳の少女セラフィマの母や妹たちが、ドイツ軍の狙撃兵に殺されるところから始まる。すぐ後に、そのドイツ軍兵士を攻撃するソ連の赤軍の兵士たちがやって来るが、その中の女性狙撃兵イリーナは母親たちの遺体を言わば無造作に焼却したのである。母親たちを撃ったドイツ軍兵士はもちろん憎いが、遺体を物のように処理したイリーナも許せないと思つて、セラフィマは復讐することを心に誓う。しかしセラフィマはイリーナに狙撃兵としてスカウトされ、イリーナの元でやがて狙撃の腕を一流の域までに上げていくのである。そして、セラフィマと同様にイリーナによってスカウトされた仲間たちから組織された、イリーナを隊長とする「狙撃小隊」は戦線を転戦していき、その間、セラフィマはドイツ軍の捕虜になったことがあったり、また恋人だった男性兵士の、女性を侮蔑した無残とも言うべき態度を見たりもする。しかし戦後には、セラフィマはイリーナたちと穏やかな生活をとにもするのである。セラフィマはイリーナに復讐するつもりであったが、それを行わなかったのは、イリーナには思いやりある心遣いがあったことを知ったからであった。——

以上のような内容の小説であるが、女性狙撃兵が主人公という珍しい設定であり、数名の「狙撃小隊」の面々はそ

れぞれに個性的であつて、物語展開もテンポ良く進んでいて、『同志少女よ、敵を撃て』は読ませる小説になっている。そして、最後にセラフィマは、「戦争から学び取ったこと」として、それは「命の意味だった。／失った命は元に戻ることはなく、代わりになる命も存在しない。／学んだことがあるならば、ただこの率直な事実、それだけを学んだ」（斜線は改行を表す）と述懐する。この箇所に、この小説の切実なテーマが語られていると言えよう。

また、ウクライナ出身のコサックで内務人民委員部（後のKGB）の少女オリガが、セラフィマたちに「ウクライナがソヴィエト・ロシアにどんな扱いをされてきたか、知ってる？」と言つたり、物語の終わりで「ロシア、ウクライナの友情は永遠に続くのだろうか、とセラフィマは思った」と語られたりして、ウクライナ問題がこの物語には伏在していることがわかる。しかし、それに触れられているのは、今指摘した二カ所くらいであり、ウクライナ問題は正面から扱われているとは言えない。

そうではあるのだが、たとえば四月一八日の「朝日新聞」（大阪本社版）では、三人の人にこの小説の感想を語らせている、そのリードの文章で、「ロシアによるウクライナ侵攻もあつてか、47万部を超すベストセラーに。」と語られているのである。たしかに今、ウクライナで戦争が続いていて深刻な問題になっているが、そのこととこの小説の内容は、

ほとんど関わらないのだ。さらに言えば、物語の中の英雄はほとんどがロシア女性なのである。それなのに、どうして「ウクライナ侵攻もあつてか」云々ということが語られるのだろうか。セラフィマたちは祖国防衛の対独戦争を戦ったのであり、近隣地域への「侵攻」をしたのではない。また、あたりまえのことだが、セラフィマたちの旧ソ連を今のロシアと同一視してはならないはずだ。そうであるのに、事態を厳密に把握しないで、ボンヤリとしたイメージでこの小説とウクライナ問題を繋げようとするマスコミの危うさが、ここには覗いているように思われる。

そのことと関連するのが、元外務省主任分析官で作家の佐藤優が、五木寛之との対談『異端の人間学』（幻冬社新書、二〇一五・八）の中で、「ウクライナ問題に関する報道を見ると、欧米の見方をそのまま垂れ流しているものも少なくありません。それを鵜呑みにすることの危険というのがズバリ『蒼ざめた馬を見よ』では描かれていると思います。」と語っていることである。ここで言及されている『蒼ざめた馬を見よ』（一九六六・一二）は五木寛之の第五六回直木賞受賞作品であり、これは西側の謀略にはまってしまった日本人記者の物語である。その記者は旧ソ連の著名作家が書いた反体制的な小説を旧ソ連の外に持ち出し、それは世界各国に翻訳されて世界的なベストセラーになる。実はその小説は当該作家が書いたのではなく、複数の書き

手が作家の文体等を真似て書いたものであって、すべては反ソ宣伝のために西側組織による仕組まれた謀略だったのである。実際の作家は身に覚えのない創作で国家保安当局に逮捕される。

佐藤氏の言う「欧米の見方」すなわち西側の見方を鵜呑みにすると、知らない内に謀略に取り込まれる危険があるのであり、今回のウクライナ報道でもそうだというわけである。もともと、ここで言われている「ウクライナ問題」とは二〇一四年のクリミア半島をめぐる問題であるが、今、二〇二二年のウクライナ侵攻においても同様のことが言えるだろう。

フランス思想が専門の西谷修は、「新たな「正義の戦争」のリアリティショー」（『世界』、二〇二二・四）で、「いまメディアは一色に染まっている。あるいは単純で強力なメッセージの磁場にはまっている」として、アメリカのイラク侵攻を例に挙げながら、「世界（ということとは「西側」のメディアや解説者は、主権国家への侵攻というところはこの「アメリカの戦争」が先例だということを、都合良く忘れてその記憶を「プーチンのロシア」に投影しているか）のようなものである。そして唱和する、「プーチンが悪の元凶、プーチン倒せ」と。と述べている。

たしかにそうである。さらに言えば報道のアンバランスである。ウクライナでの民間犠牲者についてマスコミは連

日詳細に報道していて、そのこと自体はマスコミとしての使命を果たしていると言えるが、それではアメリカ軍のイラク侵攻のとき、マスコミはどれだけ報道したであろうか。イラク侵攻でイラクの民間人の犠牲者は、米国の報告でさえ一一万六千人とされていた。これは少なく見積もっている数字であろうから、実際はこれ以上だったと考えられるが、この膨大な民間犠牲者について、当時日本のマスコミはどれだけ詳細に報道したであろうか。また、イラク侵攻は核疑惑が口実だったが、実際には核は無かったのである。そのことについても、マスコミはどれだけ追究したであろうか。また、故・安倍晋三はここぞとばかり「核シエア」論を持ち出していたが、これは金平茂樹が「ウクライナ侵攻から導き出された言葉「殺すな」」(同)で述べているように、ナオミ・クラインの言う「惨事便乗型資本主義の粗雑でかつ幼稚な形態」であろう。故・安倍晋三の低劣で悪質な発言はともかく、私たちは報道を冷静に判断しなければならぬ。

では文芸批評家は、ウクライナ危機あるいは戦争の問題をどう捉えているのだろうか。

## 二

文芸批評家の神山陸美著の『戦争とは何か』(嚮標、二〇

二二・八)は、タイムリーな出版である。ウクライナで戦争が勃発し、今も続いているからだが、しかし神山氏は、以前から戦争の問題を考えてきた文芸批評家だと言える。たとえば神山氏は、二〇〇九年八月には思潮社から、その名も『二十一世紀の戦争』という著書を刊行している。

その『二十一世紀の戦争』の中の、この本の表題となった論考「二十一世紀の戦争」では、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』から、「あの『ナショナリズムの時代の終焉』は地平の彼方にすら現れていない」という言葉のある一節を引用して、神山氏は次のように述べている。すなわち、「だが、アンダーソンの予測はそれから三十年経った現在も、なんら変わっていない。私たちの時代の最も普遍的で正統的な価値である想像の共同体としての国民国家は、ネーションそのもののはらむ二重性によってたえず危機にさらされている」と。「二重性」についての明示的な説明はないが、文脈から読み取れるのは、「二重性」というのは、ネーションが国民国家を形成する大きな要因であるとともに、他方でネーションは他のネーションに対して優位であろうとして抗争の要因ともなる、ということだと考えられる。

フランスに典型的に見られるように、国民国家は市民革命を経て形成されたのであるが、そうであるならば、市民革命の理念である「自由・平等・友愛」を国民国家は引き

継いでいいはずであるが、残念ながらそうはならず、反対に戦争を引き起こす組織となってしまうたのである。なぜなのか。その問いに答えようとした著作が、本書の『戦争とは何か』であつたと言えよう。本書は五部構成からなっている。

まず「第一部 ウクライナ戦争をどうとらえるか」では、前述した「ネーションそのものの二重性」についても触れられ、「民族」<sup>ネーション</sup>とは旧約聖書の時代から「他との優位獲得のために闘争をおこなうものの謂いでした」とされ、<sup>ネーション</sup>「国民国家は自立を遂げれば遂げるほど覇権を求める面がある」と述べている。それは他の国民国家<sup>ネーションステート</sup>に対して「ゆるしがたさ」の思いを抱くことであるが、実はそのことに気づくことが「戦争」を乗り越えていく道にほかならない」とされる。このような問題を、神山氏はドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の中のイヴァンの語る「大審問官の物語」やハンナ・アレント、ベンヤミンの「歴史の概念について」などに論及しながら展開している。

「第二部 なぜいま絶対的非戦論が問題とされなければならないのか」では、その「絶対的非戦論」とは「絶対的な『赦し』の立場」でもあって、ローザ・ルクセンブルクのよう<sup>に</sup>、たとえ虐殺されることになっても、「抗戦する代わりに、左の頬も差し出すような態度を示す」ことだとする。そして、あのオーム真理教の麻原彰光を擁護した吉本隆明

は、「悪の者にこそ、パブリックな光が注がなければならない」という、「絶対的な赦し」の姿勢を示そうとしていたと、神山氏は述べている。「赦し」はそこまで行つて真の「赦し」であつて、「絶対的非戦論」を貫くというのは、そのような精神と姿勢を堅持することであろう。神山氏は、「真にパブリックなものとは何かと問いかけた時、多くのユダヤ人をアウシュビッツへと追いやつたアイヒマンのような存在をも容れることができてこそ、それは、パブリックの名に値するというアレントの思想と無縁ではない」と述べる。

本書の叙述は淡々としていると言えるが、述べられていることをよく噛みしめてみると、実は極めてラディカルなことが語られていることがわかる。「絶対的非戦論」とは「絶対的な『赦し』」の立場であつて、親鸞の浄土仏教で言うならば、それはアイヒマンも麻原彰光も、そして第二部で語られていないが、おそらくはヒトラーをも、言わば「絶対他力の教え」で救おうとするものであろう。

本書の表題ともなった「第三部 戦争とは何か」で神山氏は、文芸批評家の竹田青嗣の評論や、ヘーゲルの『精神現象学』などに論及しつつ、さらに夏目漱石にも言及して、「人間も自己中心性」の問題について述べる。もちろん、この「自己中心性」を延長していくと戦争の問題に繋がってくるのである。それは、他の国民国家に対して「ゆるしが

たさ」の感情を抱くことに通じるからである。漱石は、「人間の自己中心性」について、自分では捉えられないものであって、「それは「不測の変」であり「思ひがけぬ心」であり「狂気」とさえ名づけられるものであるということをおう」としているとされる。たしかに、たとえば『こゝろ』の先生がKに対して取った、「お嬢さん」をめぐるの抜け駆けとも言える行為は、そうだと言えよう。

漱石は「人間が、内面にうごめく欲望や恐怖、虚栄や我執からのがれられないかぎり、戦争は必至である」と考えたが、この「欲望や恐怖」そして「虚栄や我執」が「自己中心性」の具体的な内容なのである。では「欲望」などの「力」による「翻弄」から逃れるためにはどうすればいいのか。神山氏によれば、その問題に対して漱石は、「欲望」や「虚栄」などを実体として考えるのではなく、それらの「力」の均衡にすぎりつく方法を採ろうとした。この問題に関連して興味深いのは、「ニーチェこそが、ニヒリズムとルサンチマンという言葉によって、人間の自己中心性を根柢からとらえた哲学者といつていいのである」として、次のように語られていることである。すなわち、「それを持ち越えるためにニーチェは、「存在」や「真理」や「善」や「美」といったものをあらかじめ持ち出してくるのではなく、たがいの欲望が、自己中心的なそれとして発露されたとしても、それを生成する欲望へと更新していくこ

とが重要であり、そのためには何をすればよいのかを考えた」と。

このあたりまでの論述から本書が提言しようとしていることの方向がほぼ見えてきたと言えよう。その方向をよりはっきりさせるために、文芸評論家の竹田青嗣も提示しているという、先ほどのニーチェとはほぼ同様の、「生成する欲望という考え」に関しての、神村氏の説明を次に見ておきたい。すなわち、その考えとは、「人間の自己中心性を持ち越えるために、いかなる超越性や絶対性にも依拠することなく、むしろ自己中心性の根柢にある欲望やエロスをたがいに認め合うことによって、そこから生成していくものに価値をおいていくこと。」である。

「第四部 ドストエフスキーと「戦争」」では、『カラマーゾフの兄弟』の中でイヴァンの語る「大審問官の詩劇」に触れて、やはり先に見たものと同様の考え方が語られていると言える。大審問官は、イエスが人間に自由を与え、そのことによって却って人間を不幸にしたと語り、イエスを難ずるのであるが、イエスは黙って大審問官の前にうづくまるのである。そのことについて神村氏は、「大審問官の前で、無言でうづくまっているイエスには、ロベスピエールのように、この世の偽善を徹底的に排するという理念はありません。むしろ、どのような偽善者であれ、彼のなかに「二人の人間の不幸の特殊性」を見出し、「許しの力」で対



するのがイエスだった」と述べる。

注意したいのは、アレントはロベスピエールの中に「抑圧された者、虐げられた者の苦しみに対する並外れた共感をみとめ、これに同情という言葉をあたえ」ているが、しかし「それが紙一重の差で、イエスにみられる共苦コンバッションと異なるものである」とされていることである。貧しい者に深く同情する点では両者は同じでも、ロベスピエールならば偽善者を許さないだろうが、イエスは偽善者をも許すという「差」である。

「第五部 漱石と「戦争」」は、本書の半分を占める分量で書かれていて、神山氏が最も力点を置いて論じたところであると思われる。それだけに読み応えがあるが、他方でこの「第五部」には首を傾げるところがあつたり、また漱石の作品を扱うならば、問題にしているところを、なぜ神山氏は取り上げないのか、という疑問も湧いてくる。論述がなされていると思われる。しかし、まず共感できるところから見ていきたい。

それは、志賀直哉の『暗夜行路』の最後の場面、すなわち時任謙作が伯耆大山の自然に包まれて、「芥子粒程」の小さな自分が大山の大きな自然に包まれて溶けていく、「それに還元される」という感じを抱く箇所についての神山氏の見解である。その箇所について神山氏は、「おのれの死に対する無限の関心はみとめられても、そのような死が、他者

との関係においてあるということへの関心がそんなにはみられないということなのです」、述べている。たしかにそうである。もちろん志賀直哉に論及しているのは、漱石との対比からであつて、漱石には「他者との関係」という問題意識があつたわけだが、志賀直哉にはほとんど無かつたと言えるのである。

さて、戦争の問題から離れるが、疑問を持つてしまう箇所について述べたい。たとえば、北一輝とその著書『日本改造法案大綱』に神山氏は言及して、北一輝が構想した社会を「天皇は、現人神として、民衆に公平なパンと地上の幸福を約束する」社会と述べられているが、北一輝は天皇を「現人神」と思ったこともないし、その構想の中でもそう述べていない。『大綱』の「巻二」で北は、「天皇ノ原義。天皇ハ国民ノ総代表たり、国家の根柱タルノ原理主義ヲ明カニス。」と述べているのである。「総代表」は「現人神」ではない。

また「あとがき」で、「(略) 小林秀雄、吉本隆明、柄谷行人の絶対非戦論を私たちなりのかたちで唱えていく」と語られているが、吉本隆明や柄谷行人はわかるとしても、小林秀雄はそうなのだろうか。たとえば、「文学と自分」(一九四〇・一一)では、「戦が始つた以上、何時銃を取らねばならぬかわからぬ、その時が来たら自分は喜んで祖国の為に銃を取るだらう」(傍点・引用者)と語っていた小林

秀雄が、「絶対非戦論」者であろうか。小林秀雄についての著書がある神山氏は、これをどう考えるのだろうか。因みに引用中の「祖国の為」は初出では「陛下の御為」(同)となっていた。

以上のような疑問点があるのだが、『戦争とは何か』は戦争の問題を文学の領域の中で原理的に考察した著書である。戦争の問題を論じるときは、一般にはクラウゼヴィッツの『戦争論』への言及がなされたりするが、本書はそれをせず、また人間と戦闘心というときにはコンラート・ローレンツの『攻撃 悪の自然誌』などへの論及があつたりするが、それもない。さらには、西谷修が『戦争論』(一九九八・八)で、やはり同名の『戦争論』(一九九九・九)で多木浩二が同様の指摘をしている事柄、すなわち戦争は起こす前には政治の一手段であつたが、起きてしまうと云わば(戦争のための戦争)という状態になってしまうという現代の戦争のあり方の問題にも触れられていない。また、国際政治や経済の問題に一切触れていない。

これらのことには正負の両面があると言えるが、ともかくも文学の領域のみからの戦争論として展開されているところに本書の持ち味があるだろう。そして、非戦は「絶対的」な赦し」の精神から生まれてくるという提言は共感できるであろう。この『戦争とは何か』は二一世紀初めにおいて、文芸批評家が戦争の問題について真摯に向き合った

書だと言え、聞くべき意見が語られている。

次に、近年の芥川賞小説と現代の日本社会の問題について見ていきたい。

### 三

第一六七回の芥川賞は高瀬隼子の「おいしいごはんが食べられますように」(『群像』、二〇二二・一)に決まった。この小説は、全国に一三の支店を持つ、食品などのラベルパッケージの製作会社の、関東地方にある支店における職場での人間関係の話である。たとえばそれは、若い女性社員が作ってくるお菓子の話であつたり、その女性社員が偏頭痛持ちで男性社員から保護されているようなところがあることに對して、不満を抱く同僚の女性社員の話であつたりする。そして、密かに進行していた、あるカップルの社内恋愛が実を結びそうなところで物語は終わる。「おいしいごはんが食べられますように」は、日々の職場の中での、人々の微妙な感情の諸相が描かれることによって、題名に象徴されているような、言わば日常生活の有り難さ、それが平穩に続くことの有り難さが語られている小説と言える。コロナ禍やウクライナ問題を意識すると、一層そのことを感じさせられる小説である。その意味での現代性がある。

ただ、現代社会の問題を抉(えぐ)っているという点では、その



前回の第一六六回受賞作であった砂川文次の「ブラックボックス」〔群像〕、二〇二一・八〕の方に眼が向けられよう。これは以下のような物語である。

——主人公の佐久間亮介は、自衛隊員や不動産営業などの仕事を転々とした後、東京で自転車便専門の歩合制メッセンジャーとして働いている。三〇歳直前で同棲相手もいる亮介は、〈ちゃんとしなくては〉と思いつつも、感情が爆発して税務署から来た調査委員だけでなく警察官にも暴力を振るい、結局、「傷害」と暴行、公務執行妨害と他の税金に関する諸々のことで刑務所に入ることになる。小説の後半はその刑務所での生活が描かれる。その中で亮介は、「自分はずっと遠くに行きたかった。今もそのように思っている」と思うのである。——

格差社会の中で生きる人々を描いた過去の受賞作としては、第一四〇回（二〇〇八年度下半期）の津村記久子の「ボストスライムの舟」があり、また第一五五回（二〇一六年度上半期）の村田紗耶香の「コンビニ人間」も突き詰めていえば、その種の小説と言える。「ブラックボックス」は格差社会の様相を素直にリアリズムの手法で描いた小説だが、主人公の、「自分はずっと遠くに行きたかった」という思いの奥には、やはり疎外からの解放の夢が込められているだろう。ずっと以前にはよく言われていたこの疎外という言葉は、一時期、死語となったような感があった。それはた

とえばポストモダンが喧伝<sup>けんでん</sup>されていた頃である。その頃には階級という言葉さえ死語となったような感もあった。疎外も階級という問題も、克服されるかのような風潮があったのである。

しかしながら、社会は逆方向に進み、格差がもたらす問題が深刻化してきた。その事態を招来させたのは、小泉政権による新自由主義政策、それを受け継いだ安倍政権などによってである。今回の安倍銃撃事件の背景には、やはりそのような社会の問題があったと考えられる。

安倍晋三を銃撃したのは、「ブラックボックス」の主人公と同じく元自衛隊員であるが、彼の直接の怨恨の対象は旧統一教会Ⅱ原理研究会Ⅱ勝共連合であって、また安倍晋三がその組織と結びついていたことであつたわけだが、注意しなければならぬのは、今回の事件はいわゆる政治的テロではないということである。森達也は『テロに屈するな』に屈するな（岩波ブックレット、二〇一五・九）でテロを定義して、「何らかの政治的目的を達成するために暴力による脅威で標的を不安や恐怖に陥れること」と述べているが、この事件はそういうものではなく、長尾龍一が『政治的殺人』（弘文堂、一九八九・七）で述べている事例と同じく、「復讐という非政治的動機によるもので、権力意思は介在してはず」、この元自衛隊員は言わば「絶望者」であって、「自己」の生涯における何らかの巨大な挫折のゆえに、自

己の未来が閉ざされたと感じ、その責任者と信ずる者への復讐として暗殺に及ぶ」という事例である。

マスコミは安倍晋三が応援演説中に銃撃に遭ったことから、「言論が暴力に封殺された」事件のように語っているが、物事の本質を把握していない見解である。この事件は、暴力対言論（の自由）といった問題では決していない。ましてや民主主義の破壊という問題ではない。民主主義の破壊というならば、戦後の民主主義を支えた教育基本法を改悪し、集团的自衛権を合憲だと強弁して安保戦争法を強行に成立させ、また戦前の治安維持法に相当する特定秘密保護法や共謀罪を成立させ、森友・加計疑獄、「桜を見る会」などの様々な不正を類被りして権力の座に居座った安倍晋三こそ、民主主義の破壊者であった。

さらには、以前より言われていたことだが、今回の事件ではつきり浮上してきた事柄が、安倍晋三と旧統一協会（原理研）との強固な結びつきである。以前、靈感商法などで人々にガラクタの壺などを高額で売りつけて社会問題化もしていた、あの統一協会＝原理研である。創始者である文鮮明はイエスに会って話をしたことがあるらしく（一）、浅見定雄『統一教会＝原理運動（略）』（日本基督教団出版局、一九八七・三）によれば、その時イエスは何語で話しかけたのかを問われて、文鮮明は「ヘブライ語なまりの韓国語」と答えたそうである。笑わせる、愚にも付かぬ話だ

が、実は原理研とはその程度の知性の集団であり、真の狙いは信仰ではなく反共という一点にある。安倍晋三やA級戦犯容疑の祖父・岸信介が原理研に肩入れしていたのも、そこにあつた。多くの場合、反共団体には思想というほどのものはなく、あるのは左翼に対しての嫌悪の情だけで、幼稚な右翼観念に捉われていた安倍もそうである。このような、民主主義を破壊しようとした極右・超反動の安倍晋三を国葬にしたのは、言語道断であつた。

これまで本稿では、現代世界の危機をめぐる話をしてきたが、では明るい未来を思わせる希望はないのかと言えば、やはりあるのである。以下、それらの話題を見ていきたい。まず、二〇二一年一月に亡くなった、詩人で文芸批評家でもあつた高良留美子の最後の著書から見ていきたい。

#### 四

『（縄文の鏡）が照らす未来社会の像』という副題目がある『見出された縄文の母系制と月の文化』（言叢社、二〇二一・六）は、二〇二一年六月に言叢社から刊行された、A五版で五三〇頁を越える大冊である。本書の「あとがき」によると、著者の高良留美子は二〇〇四年から「本格的な神話研究を自分に解禁した」そうであるが、その後の十数年に及ぶ蓄積が本書に盛り込まれていて、読者は本書を讀

み通すことで縄文時代のことやその社会の有り様を詳しく知ることができる。しかし、大切なのはそれよりも、縄文を学ぶことは「未来社会」を展望することに繋がるということである。

ここで私に思い起こされるのは、やはり縄文時代に注目して、縄文時代について熱っぽく語った、晩年の梅原猛の論である。梅原猛はたとえば『森の思想が人類を救う』（小学館ライブラリー、一九九五・四）で、縄文人の「基本的な世界観としてつぎの二点が考えられる」として、「まず第一点は、生きとし生けるものはみんな平等であり、同じ生命である、この考え方が基本です」と述べ、「第二点は、死んでも必ず再生してくるという、生死の循環の考え方です」と語っている。そして、この平等志向と循環的生死観を指摘したあと、梅原氏はこれらを近代以降の極端な（人間中心主義）的な発想を対峙させて、現代の私たちに反省を迫っているのである。

中年以降の梅原氏は哲学者の枠組みに収まらない活動をしたが、晩年に入ってから、縄文を積極的に評価する論を展開した。そのことと関連してアイヌ文化にこそ縄文文化が残っていると、たとえば『新版日本の深層 縄文・蝦夷文化を探る』（佼成出版社、一九八五・一）でも、「（略）アイヌ文化に、あるいは日本の古代文化、縄文文化の謎を解くカギが含まれているのではないかと期待してい

た」と述べている。

アイヌ文化のことはともかくとして、このように縄文文化の特質を、平等志向や循環的生命観などに見る点において、高良留美子と梅原猛とは共通しているが、高良氏の縄文論はそれを超えてラディカルに展開されているのである。それは本書の主題目にある言葉、すなわち「母系制」「月の文化」という言葉に示されている、フェミニズムとも大いに関わる展開である。この高良氏の縄文論には、現在の私たちが深く考えなければならぬ問題が提起されていると言える。これから本書の内容を見ていきたいが、浩瀚な本書を要約することは、おそらくあまり意味の無いことだろう。なぜなら、本書には「縄文」「母系制」「月の文化」に関わる実に多くの学説が紹介されているのだが、それら様々な学説の一つ一つを知ることが本書を読む醍醐味でもあると思われるからだ。したがって、ここでは結論部分のみに絞って、その論旨を紹介したい。

前述したように、縄文時代の生死観は循環的だったのだが、高良氏は先学の説を踏まえながら、その生死観が「月の満ち欠けになぞらえた再生・循環の生死観であった」として、「縄文人は月は大地母神の娘であり、天空にないときは母なる大地母神の胎内にこもって甦りの時を待っていると考えて、それを土偶に形象化していたのである」と述べる。大地母神の存在から察せられるように、縄文社会は女

性の働きが重要であることが認識されていたので、たとえば「女性は主要な食料の生産を担っていたのである」。さらには酒造りや繊維関係の仕事もしていた。もちろん男性も狩猟や漁撈、伐採などの仕事をしていたわけで、その分業体制はあくまで単に分業体制であり、そこに差別や支配の要素はなかったのである。その対等なあり方について、日本の古代社会では所有形態において女性が男性同様に「所有主体になりえた」という説も紹介されている。

さらに注意されるのは、墓の副葬品に顕著な違いが無いことから、縄文社会には貧富の差も無かったことが推察されるという説が引かれていることである。高良氏はこう述べている。すなわち、「(略) 共同の生産と生産物の平等で公平な分配は、縄文社会の基本的な原則であり思想であり、それは自治によってこそ持続可能な秩序であった」と。と言っても、家族の独立性がほとんど無く、家族は集団に埋没していた、ということはなかった。そしてその家族形態は、地域や時代によって少し差異があったが、たとえば西日本では縄文期の遅くまで「妻方居住婚」が残っていたようである。となれば、「妻方居住婚」の社会とは「母権・母系制社会」だったと言えるであろう。だから、この社会のリーダーは女性だったと考えられ、リーダーは、「再生力をもっている」と信じられた「カリスマ性をもつ指導者だったのだろう」と語られている。

実に素晴らしいと思われるのは、縄文社会は相互扶助の社会であったことである。北海道の貝塚から小児麻痺（ポリオ）の推定一八歳の女性の人骨が出土したのだが、幼年期から自力歩行ができなかった少女が一八歳まで生きられたということは、やはり縄文社会には相互扶助が行きわたっていたということであろう。高良氏は、安田喜憲の著書『稲作漁撈文明―長江文明から弥生文化へ』の文章を、共感を持って引用している。一部を省略せざるをえないが、それは次のような文章である。

「縄文時代の人々は(略) 森と海の資源を極限にまで循環的に利用する技術を有し、平等主義に立脚し、戦争を回避する社会制度を維持し、土器作りや芸術活動に異常なほどのエネルギーをかたむけ、大規模な木造建築物を作り出す技術を有していた。そして女性中心の社会であり、精米の誕生と死をもつとも重要なことがらと考え、アニミズムの世界観を共有し、生きとし生けるものの命に畏敬の念をもつて自然と調和的に生きたのである」。

この文章で語られている事柄は、「大規模な木造建築物」以外は、残念ながら今日の社会には無いものである。高良氏は、「女性が権威をもち、平等性を重んじて格差と国家と戦争への道を抑制していた縄文時代の母系制社会から、わたしたちは多くを学ぶことができる」と述べているが、同感である。縄文時代には、今日の私たちが範とするべき社

会があったのである。理想のモデルは遠い過去にあったと言えようか。

理想社会のモデルを過去に求めるということでは、近年の柄谷行人の試みにもそれを見ることが出来る。柄谷氏の『哲学の起源』（岩波書店、二〇一二・一一）は、『世界史の構造』（岩波書店、二〇一〇・六）で十分に論じられなかった古代ギリシア哲学について述べられているが、もちろん両著作はテーマの上で連続している。『世界史の構造』では、世界史を交換様式の変遷から見ていく試みがなされて、世界史は「A互酬」から「B略取と再分配」へ、そして「C商品と交換」へと進んできたと言われ、来たるべき次の段階「D」はまだ明らかではないから「X」とされている。しかしながら柄谷氏によれば、「D」とは「A」における「互酬的」相互扶助的な関係を高次元で回復するもの」なのである。

柄谷氏は「D」の萌芽的なモデルを、古代ギリシアのイオニア地方の「イソノミア」に見ているのである。「イソノミア」とは「無支配」のことであり、したがって自由をも表していたが、「イソノミア」が行われていたイオニアでは「人々は実際に経済的にも平等であった」とされている。柄谷氏はあり得べき未来社会のモデルを、遠い地のイオニアの「イソノミア」に求めたのであるが、高良氏は身近な日本の縄文時代に求めたと言えよう。その違いはあるものの、

期待される「未来社会」像においては両者の論は重なっているところが多い。それは私たちが目指すべき社会像である。

次に、やはり未来への提言を含む著作について見ていきたい。すでに論及した柄谷行人の近著も取り上げたい。

## 五

現代の問題をどのように考えれば未来への展望が開けるか、というテーマについて、建設的な提言を行っている文芸批評家に竹田青嗣がいる。竹田氏は『人間の未来——ヘーゲル哲学と現代資本主義』（ちくま新書、二〇〇九・二）で、近代国家は多くの人々にとって過酷な権力の象徴として現れたとして、さらには国家どうしの過酷な闘争は全体主義国家まで生み出すことになったのだが、本来は近代国民国家というものはそういうものではなかったと述べる。また、資本主義も剰余労働による搾取によって労働者を貧しい状況に追いやっているが、しかし資本主義も労働と企業という自由な活動を促し、またそれらによって支えられるものであったと述べる。そうなのだが、実際には国家は抑圧装置と化し、資本主義は搾取の組織と化してしまったのである。

だから、それらに対して反国家の批判や半資本主義の批



判が出てくるのは、当然であるが、しかし国民国家と資本主義を廃することは現実的ではないと竹田氏は述べる。ではどうすればいいのか。竹田氏はこう述べている、すなわち、「それがどれほど多くの矛盾を含もうとも、現代国家と資本主義のシステムそれ自体を廃棄するという道は、まったく不可能であるだけでなく、無意味なものでしかないこと。そうであるかぎり、現在の大量消費、大量破棄型の資本主義の性格を根本的に修正し、同時に、現代国家を「自由な相互承認」にもとづく普遍ルール社会へと成熟させる道をとる以外には、人間的「自由」の本質を擁護する道は存在しないこと。」と。つまり、国民国家と資本主義にある本来的で良質な部分を「成熟」させることが、現代の課題に應える唯一の道だというのである。

竹田氏は、国民国家も資本主義もその負の部分はそれら組織の属性であって、本質は良質な部分、たとえば市民社会の相互承認のあり方、それに基づく自由な競争なのだと語っている。なるほど、それが望ましいあり方であって、そちらの方向へと政治も経済も「成熟させる道」を取ることが可能であるならば、そうありたいものだ。しかし、資本主義と国民国家が誕生して以後、一度としてそれが真に実現したことがなかったことを省みるならば、実は竹田氏が属性と述べている事柄の方が本質であって、彼の言う本質はあり得べき理想にすぎないのではないかと思わざるを

得ない。そう考えると、竹田氏の提言は絵に描いた餅に見えてくる。たとえば保守派の政治家に竹田氏の提言を語ったならば、せせら笑うだけだろう。竹田氏の善意はわかるが、残念ながらそれは善意でしかないのである。

そうなると、次にはやはり資本主義と近代国民国家に反措定を突きつける提言者の言説を見ていかなければならないだろう。経済学者の大内秀明は『甦るマルクス「晩期マルクス」とコミュニタリアニズム、そして宮澤賢治』（社会評論社、二〇二二・九）で晩期マルクスの思想がどういうものであったかを検証しながら、未来への提言を行っている。おそらく間違っていないだろうと思われる、大内氏の説には、唯物史観はマルクスにとつて、その後の研究のための「単なる作業仮説」であって、『資本論』第一巻を書いている時には、とりわけその後のマルクスは唯物史観から離れていたという見解がある。さらにプロレタリア独裁論からも離れていたとしている。そしてより重要なのが、マルクスがザスリーリッチへの返書を通して、「（略）「パリ・コムニューン」などによる共同体の役割の重視とともに、共同体社会主義（コミュニタリアニズム）の見地への傾斜を一層強めていたように見える」と述べられていることである。

さらに大内氏は、次のようにも述べている。「すでにマルクスは『フランスの内乱』でも、コムニューンの共同体を



重視し、職人たちの協同組合の役割、そこから「コンミュニオン連合」としての社会主義を展望していたのだ。その点では、「初期マルクス・エンゲルス」の唯物史観の階級闘争、そして「プロレタリア独裁」を教条的に主張したエンゲルスと「晩期マルクス」との立ち位置の違いを無視してはならない」と。これまでのマルクス主義者のほとんどは、この「晩期マルクス」の新たな思想への展開を顧みることなく、初期あるいは中期のマルクスの思想でもって、マルクス思想の全体を理解したつもりだったと思われる。「マルクス主義とマルクス自身の思想とは違う」と言っていた人たちも、プロレタリア独裁や唯物史観などは、マルクスの生涯変わらぬ思想だと理解していたと思われる。しかしながら、「晩期マルクス」はそれまでとは異なった地平に出ていたわけである。またその地平こそ、東欧、ソ連の旧「社会主義国家」が崩壊した後の、マルクス思想再生の一つの地平ではないかと考えられるだろう。それは協同組合的な社会主義である。

因みに、協同組合を重視した人物に賀川豊彦がいるが、彼の考える社会主義も「晩期マルクス」の思想と繋がっていると言える。あるいは、大内氏が同書で論及している宮澤賢治の思想とも繋がる要素を持っていると言えるかも知れない。

柄谷行人が『力と交換様式』（岩波書店、二〇二二・一

〇）で論じていることも、今見た大内秀明の論と重なっているところがある。もつとも、柄谷氏の論は人類の経済の歩みを交換様式から見るという壮大な枠組みでの論であり、先にも触れたように、「A互酬」から「B略取と再分配」へ、そして「C商品と交換」へと歩んで来た人類は、来たるべき「D X」の段階を目指すべきなのであるが、その「X」に関して具体的に示唆的な提言を述べているのである。

「（略）交換様式から見ると、Aにもとづく「ユートピアン社会主義」は、CとBの「力」から人を相対的に自立させる在り方として、今なお健在である。つまり、産業資本主義が高度に発達した今日においても、それは古びていない。」と述べている。

さらに柄谷氏は、『力と交換様式』の終わり部分でほぼ結論的なことを、しかし具体性のあることを、今の引用に続けて述べている。長くなるが引用したい。「たとえば、ロバート・オーウェンが創始した「協同組合」は、今もさまざまななかたちで存在し、機能している。また同様のことが、フリーエが創始した「産業的協同体」（ファランジュ）についても言える。さらに、エンゲルスは言及しなかったが、ブルードンが唱えたアソシエーションイズムも、広い意味でユートピアンだといってよい。それは、アソシエーションを拡大し、国家や資本を必要としないような社会を創り出そうとするものである。そして、彼が唱えた、人民銀行が

相互主義的交換組織なども、現在、世界各地に存在している」と。

さらに、もう一つの例を挙げればとして、続けて、「後進資本主義国家でまだ残っている農村共同体を、「協同体」（アソシエーション）、すなわち、個人が自由独立性をもつような共同体に変える試みがある。交換様式でいえば、それは、BやCの下で半ば埋もれているAを取りもどそうとするものである。スペインの協同組合モンドラゴンの例に見られるように、それが大規模に行われている例もある」と述べている。

このように、「D X」の「X」というのは、やはり「協同組合」的な交換様式と言っているだろう。それが世界各地で徐々に広がっていけば、資本主義も国民国家も解体していくという展望を、柄谷氏は持っていると言える。

さて、こうして見てくると、現在の国家と資本主義を修正して本来のものに戻すことによつて社会変革を試みようとする竹田青嗣の論か、あるいは協同体や協同組合を拡充することで国家と資本主義を超えようとする大内秀明や柄谷行人の論が、今日においては最も有望な論となっていると言える。ただ、先にも述べたように、竹田青嗣の論は、彼は現実的だと思っているだろうが、その実、少々お人好しの空想的な論ではないかと思われる。資本主義と近代国民国家の、その本質に立ち返ることによつて、と竹田

氏は言うのであるが、これまで一度として真に立ち返ることが無かったことを考えれば、それは見果てぬ夢ではないかと考えられるのである。他方、世界各地で展開されている協同組合の存在を考えると、むしろ大内氏や柄谷氏の提言の方が現実性があると言えようか。

以上のように、現代の文学と思想の、おそらく先端部分と判断されるものを、本稿では瞥見してみた。

#### 〔付記〕

本稿は、「千年紀文学」第一三五号（二〇二一・七）、第一三八号（二〇二二・四）、第一三九号（二〇二二・七）、第一四一号（二〇二二・一）、および「季報 唯物論研究」第一六一号（二〇二二・一一）に掲載した小論を加筆訂正し、一つの論文にまとめたものである。

（ノートルダム清心女子大学名誉教授）